

# ちよっこしい話

木島病院報

オリンピック号

令和3年11月発行  
発行：木島病院新聞委員会

## 「東京2020 オリンピック・パラリンピック」

医師 北岡 克彦

昨年2月26日、首相官邸での新型コロナウイルス感染症対策本部において「多数の人が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については大規模な感染リスクがあることを勘案し、今後2週間は中止、延期、または規模縮小等の対応を要請する」ことが決定され、これを受けて3月以降に行われる予定であったスポーツの全国大会はことごとく中止となり、ついには東京2020オリンピック・パラリンピックも1年延期が決定しました。

本年7月8日、東京オリンピックの観客の扱いについて、代表者会議で4度目の緊急事態宣言が出る都内の会場は無観客とすることを決め、引き続いて開いた関係自治体との協議会で、まん延防止等重点措置が適用されている神奈川、千葉、埼玉の会場の無観客も決まりました。1年前、IOCバウハ会長をはじめとする関係者が大会延期を決定した際、安倍元首相が表明した「完全な形での開催」はかなわず、緊急事態宣言下で開催し、大半の会場が無観客となる異例の五輪となりました。

無観客となりましたが選手、役員の救護は必要であるため、私が日本ハンドボール協会の医事委員をしている関係で、選手のメディカルサポートスタッフとして木島病院からドクター1人、ナース3人、リハスタッフ2人がオリンピックに参加しました。

そこで本報ではオリンピックハンドボール競技のメディカルサポートに参加した皆さんに実際の状況が分かりやすいように内容を分担して書いてもらいました。さらに、北國銀行から選手として参加した塩田選手と角南選手にも特別寄稿をお願いしました。また、パラリンピックの水泳競技のメディカルサポートに参加した2人にも寄稿をお願いしました。オリンピックとはひと味違うパラリンピックのサポートの寄稿も一読の価値があります。

このような貴重な経験ができたのも病院の皆さんの温かい支援のおかげです。この場を借りてお礼申し上げます。(なお残念ではありますが会場内で撮影された写真はJOCの規定により大部分が掲載できませんでした。ご了承ください。)



2019年11月、東京2020テストイベントとして開催されたJAPAN CUP 2019 渋谷(WOMEN)の国立代々木競技場



アクレディテーションカード



参加証



# オリンピックに出場して

北國銀行ハンドボール部 塩田 沙代

2020東京オリンピック出場に際し、たくさんの応援が私たちの力となり後押ししてくれました。自分の夢でもあったオリンピック出場を叶えるまでにはたくさんの苦しみがありました。怪我でプレーできない期間もありました。しかし、木島病院で手術を受け、院長や北岡先生をはじめ、看護師さんやトレーナーさんのサポートを受けて何度も立ち上がることができました。そんな先生方が、オリンピックでは会場ボランティアとして来られていて、非常に心強かったです。本当にたくさんの方に支えられ、オリンピックの舞台に立つことができました。結果としては満足いくものではありませんでしたが、オリンピックで経験したことを、今後の北國銀行での活動に生かしていきたいと思います。今後ともご支援、ご声援よろしく申し上げます。



選手村退村時の北國銀行選手、(左から)  
塩田、横嶋、角南、田邊、大山、佐々木の各選手



試合終了後、国立科学スポーツセンターでの集合写真

北國銀行ハンドボール部 角南 唯

小さい頃からの夢でもあったオリンピックの舞台に立つ事ができ、また姉妹で試合が出来た事をとても嬉しく思います。東京オリンピックでは私の人生の中で一番濃い時間を過ごせ幸せでした。大会期間中は村内でテニスプレイヤーのジョコビッチ選手や、バスケットボールの八村塁選手、ハンドボールノルウェー代表の選手達に写真を撮ってもらい、1人でテンションが上がっていました(笑)。これまで木島病院の院長先生はじめ、沢山の方々にサポートをしていただきました。また北岡先生には何度か手術をしていただき本当に感謝をしています。これからも木島のみなさんに感謝の気持ちを忘れずに、元気にハンドボールをしている姿を見ていただけるように頑張りたいと思います。





## 事前準備

理学療法士 樋口 武史

今回、東京2020オリンピックへメディカルサポートスタッフとして参加させて頂きました。そのオリンピックへ参加するにあたり、事前研修として様々な研修が組織委員会より準備されておりました。

事前研修には、ボランティアスタッフ全体を対象とした『全体研修』、メディカルサポートスタッフのみを対象とした『役割別研修』、そして担当する競技会場に直接赴いての『会場研修』と大きく3つが準備されていました。一部、E-learning もありましたが、基本的に東京などの都市にてメディカルサポートスタッフが集合して開かれる予定でした。しかし、新型コロナウイルスの影響によりオリンピックが延期となり、これらの事前研修もすべて中止となったため、研修はすべてE-learning にて受けることとなりました。

オリンピックそのものだけでなく、このような部分にまでも新型コロナウイルスの影響が及ぼされたことには、悲しさと悔しさを感じることもとなりました。しかし、研修自体はメディカルスタッフとしての必要知識を改めて学べたり、普段のメディカルサポート活動には無いような大規模国際大会ならではの銃創・爆傷に関する研修や薬物に関する研修など興味深い内容のものがたくさんあり、非常に多くを学ぶことができました。

会場研修が無く、サポート当日になって初めて会場を訪れることになるなど、イレギュラーなことが多く、不安な思いもありました。しかし、周りの多くのスタッフみなさんのご協力もありながら無事に終えることが出来、なかなか他では得られない大変貴重な経験が得られたことは自分にとってとても大きな財産となりました。スポーツ理学療法士を志してから、オリンピックに携わるということは一つの大きな目標であり、夢でした。これを叶えられたことは本当に嬉しく、その機会を与えて下さった北岡先生、参加にあたってご協力いただいた病院職員の皆様には深く感謝いたします。本当にありがとうございました。



駅の地下通路内のポスター前にて。  
現地では各所にこのようなポスターやフラッグがたくさん設置されており、大会を盛り上げていました。

## 会場への入場、食事について

柔道整備師 畑 圭祐

ハンドボール競技は国立代々木競技場第一体育館で行われました。会場は一般の方が入れないようにバリケードされており、各ゲートにあるプレハブを通らなければ敷地内に入場する事が出来なくなっていました。プレハブ内には大会スタッフや自衛隊の方々が出て、消毒・検温・身分証明・顔認証・手荷物検査を行います。テレビなどでも見たかもしれませんが、選手やスタッフが首から下げているカードが身分を証明する為に必要なアクセレディテーションカードで、個人番号・バーコード、顔写真、役割、会場内での行動可能範囲などが記載されています。大会期間中にはこのカードを盗まれる事件などもあり、運営スタッフの方から注意喚起の連絡も回っていた為、帰りの夜道はビクビクしながら移動していました。

会場への入場後はボランティアスタッフを管理しているチェックインセンターに行き、チェックイン手続きをしてから仕事を始めます。チェックインすると食事の引換券をもらえて、活動参加日数に応じてピンバッジなどの記念品も貰いました。

食事は敷地内にある仮設テントで支給され、テント内はアクリル板が設置された席がいくつもあり、感染対策を行いながら多くのボランティアスタッフが休憩をしていました。食事は「おにぎり」と「日替わりのお惣菜」で、決して豪華な食事ではありませんでしたが、スポンサー提供のコカ・コーラ社のドリンク選び放題であったり、meiji 社のアイス食べ放題などで少しでも楽しめたかなと思います。

活動の中で、他の施設や病院で働くスタッフの方々と情報交換をしたり、スポーツを通じて色々な繋がりを持てたことは大変貴重な経験になったと思います。事前の研修もオンラインになり会場研修も無くなったりと、不安が多いままの大会参加でしたが同日に参加していたメディカルスタッフの方々の協力もあり、無事に活動を終える事ができました。

オリンピックに参加するという機会を下さった北岡先生、協力して頂いた病院職員の皆さん、本当にありがとうございました。



代々木体育館の外観



## 医務室、物品、カルテについて

看護師 東 万里子

選手用メディカルスタッフは主に試合会場と医務室に分かれて配置されていました。今回試合中の搬送や応急処置はなく、医務室には選手が来ることはなかったですが、役員や審判の方が来られることがありました。各チームにはチームドクターやトレーナーが帯同しており、怪我があった場合はそれぞれのチームで対応されていました。医務室に来た場合はまず検温を行い、もし37.5度以上の発熱があった場合は外に設置されている隔離テントに案内します。医務室の中は広く、処置台とトイレがついた部屋が2つありました。点滴棒や処置用ライト、簡易心電図などが置かれていました。物品や薬品は専用の棚や冷蔵庫、救護バックに準備されていました。薬品の棚には鍵がついており厳重に管理されていました。予備のみまで数多く揃えられており、急変時の救急蘇生から出血などの外科系処置など、あらゆる処置に対応できるよう揃えられていました。胸腔ドレナージ用の物品まであったのは驚きました。今回膝関節の穿刺の介助につく場面がありましたが、棚や救護バックなど多くの物品の中から欲しい物品を探すのが大変で時間がかかりました。また、処置で縫合セットを使用することがありましたが、撮子やクーパーなども全てディスプレイ品になっていました。余った医薬品は大会終了後、法令上壊渡は不可のため全て廃棄すると聞きました。とても勿体ないなと思いました。

診察や処置を行った場合は、氏名や国名、症状や処置内容を紙カルテに記載し、医師が電子カルテに入力していました。またノートに救急時の対応や連絡先などが記載されておりシフト毎に情報共有ができるようになっていました。

今回参加させていただき、オリンピックという大規模の大会には、あらゆる場面に対応できるよう多くの機材や物品が準備されており、メディカルスタッフだけでなく、他にも多くのボランティアスタッフが携わり、各部署で連携を図り安全に大会が開催されているのだと感じました。貴重な経験をさせていただいた病院職員の方々に感謝しています。本当にありがとうございました。



医務室で膝に水がたまった役員の処置をする北岡ドクター



医務室前にて役員や審判の方と

# 怪我をした選手の搬送 ・スタッフの配置

看護師 本領 祐香



バックボードを用いての搬送練習 選手役は北岡先生です

私からは試合会場でのスタッフ配置・業務内容に関して説明させていただきます。

試合会場では試合中に医師・歯科医・理学療法士・トレーナー・看護師がコートサイド(以下FOP)に必ず配置されます。

試合外での処置は医務室で対応しますが、試合中にトラブルにあったときの超緊急時の対応がFOPスタッフの役割です。コート内で選手自身がベンチに戻れず、コート内で動けなくなった場合にコート外に搬送をします。

コートサイドにはストレッチャーや車椅子の搬送物品や救護・歯科バッグが常置されますが、コート内で倒れて動けない選手はバックボードを使用し搬送します。まれにテレビ観戦など使用する場面を見た方もいると思いますが、このバックボードでの搬送がとても重要で、試合開始前までには必ず自分が

持つ場所の位置や指示をする医師の声かけで体を横におけるタイミング等を練習します。今まで講義等で見た事はあっても実際に手で触って練習してみるとなると難しい点もあり、身長に合わせた長さの変更・分割するボタンの位置や作業の流れ等を知ることができました。

私の勤務シフトは選手の方々は搬送する事なく、無事に試合を終了することができよかったですが、他のシフトでは実際にバックボードで搬送する場面があったと伺いました。しかし、すぐにコートに入れるわけではなく、レフェリーからマッチオフィシャルへ伝達し、オフィシャルからの指示で試合会場



にいる選手用医療事務括者に連絡があつてようやく私達はコート内に入る事ができ搬送となります。その場面は全世界で放映され、同業者から手際の悪さを指摘する声もあったとの事です。練習でも緊張して難しく感じたため、実際試合中での対応となると想像するだけでも緊張しました。超緊急時はその数分秒の時間も重要となり、スタッフ間のコミュニケーションや事前練習・物品の配置場所の認識が必要だと再認識しました。

#### 新型コロナウイルスの蔓延・医療

機関がひっ迫といった中、オリンピック開催自体の是非がありましたが、開催となってからはテレビで初日から日本・他国の選手達がこの時のために頑張っている姿に感動しました。実際コートサイドに配置された時は自分の仕事を忘れるくらいの迫力で、世界で戦う選手達の試合を観る事はとても貴重な体験でした。新型コロナウイルスの影響がなければ、たくさんの観客と一緒にこの感動や悔しさを分かち合えたのだと、残念な想いも感じました。

メディカルスタッフとして参加させていただきましたが、処置等も少なく看護師の役割は少なかったのですが、他の医療機関や病院外で働く医療従事者やトレーナーの方々と情報交換ができました。また、オリンピックという大規模国際試合であることで、他のボランティアスタッフや全国から応援に来ていた自衛隊・警察官、会場の朝顔を育てた子供たちの存在など、実際に会場に行ったことでいろんな人が関わっている事を知ることができました。

病院の日々の仕事でも院外の救護活動でも知識と経験はさておき、物品確認や移動動線や連絡方法はどの場面でも通じる事で基本であり、今後の仕事に繋げていきたいと思えます。

緊急事態宣言が出ている都内に送り出してくださった院長や病院職員、シフトで協力いただいた病棟職員、この様な貴重な体験に参加の機会をいただいた北岡先生には感謝申し上げます。ありがとうございました。



医務室前で看護師や医療事務責任者と

# PCR検査及び感染予防生活



看護師 平野 友香里



PCR 唾液採取方法

新型コロナウイルス感染症第5波の拡大にて緊急事態宣言下で行われた東京オリンピック。まず、参加させて頂いた事にお礼申し上げます。

残念な事に無観客となりましたが、関係者だけでも数万人がこの大会に関わる事となりました。海外からの選手やコーチ、メディア関係者はもちろん、オリンピック・パラリンピックに関わる全スタッフが新型コロナウイルス感染症の嚴重な感染症対策を行いながら大会に臨みました。会場内に入る際も空港の検疫のような荷物チェックと共に消毒と検温があります。会場内では、スタンダードな感染症対策は徹底して行い、数メートル先に選手はいますが、コミュニケーションや接触もほとんどありませんでした。

感染対策の重要な一部としてPCR検査を紹介します。大会参加者間や東京・日本国内で感染拡大の可能性を抑える為、参加地域や役割・責任によって検

査の頻度が異なります。メディカルスタッフとして参加した私達は、毎日唾液PCR検査を行う必要がありました。ストローを使って容器に唾液を採取し、バーコードシールを貼付します。個人が特定できるアクセシビリティカードの番号と、容器に貼付したバーコードの番号を専用アプリに入力し、チェックインの際に専用BOXに入れる作業を毎日行い、もし、陽性であれば24時間以内に連絡があり、鼻咽頭PCR検査を実施する流れとなっていました。会場には37.5℃以上の発熱者が出た場合、医師の判断で入る隔離室がありました。自分自身も毎日対策をしているものの、もしかしたら・・・と思うと不安でしたが、幸い私達の参加していた期間には、ハンドボールの会場から陽性者が出たと耳にせず、



感染予防がしっかりできていたのだと感じました。

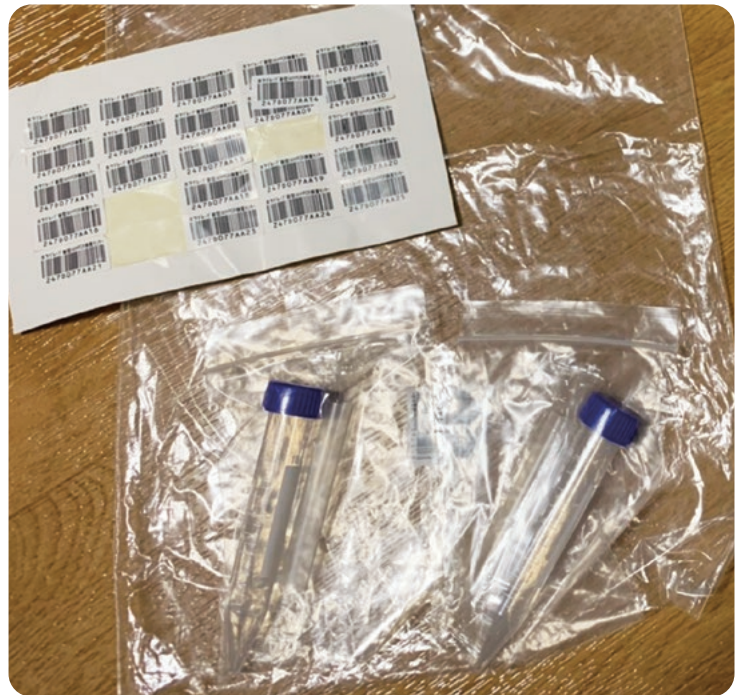
試合を観戦出来る時間もありましたが、オリンピック選手の迫力ある試合を目の前に、応援に熱が入り、盛り上がってしまいます。また外国のチームの声援や応援歌が聞こえる場面もありましたが、日本人スタッフは声を出さずに手を叩いて応援しており、日本だからこそ開催できたコロナ禍の大会なのかなと感じました。

参加期間中の生活は基本、用意されたホテルから会場の往復のみ。5日間のうち2回洗濯をしましたが、ホテル内には自衛隊、外国の大会スタッフ等もあり、コインランドリーが混雑する場面もありました。対策として、時間を夜中や朝方に変えて混雑を避けるようにしました。朝食はホテル、1日1食はコンビニか会場での塩辛いお弁当(熱中症対策?)で、皆で東京グルメを堪能する事はもちろんありませんでした。東京は私達が住む石川県と違い人口が多い為、移動時に距離を保つことが困難なこともありました。改めて、1人1人の感染に対する意識が本当に大切だと感じました。

コロナ禍で大会が開催されるかギリギリまで分からず、感染を予防できるのか等の不安を抱えていましたが、練習に励んできたアスリートの方々の事を思うと、大会に出場できた事はメダルが取れなくともそれぞれに意味があり、努力が報われた様で本当に良かったと思います。正直、自分自身も参加をするのか不安と迷いがありましたが、参加した事でとても心が動かされ、自分の肌でしか感じられないこの大きな現場に携われて本当に良かったと感謝しています。

直接選手に対応することはできませんでしたが、アスリートや大会に関わるスタッフとしてまだまだ知りたい、勉強していきたいと思う事がたくさん見付き、周りのメディカルスタッフからも刺激をもらい、特別な経験ができたと感じています。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった北岡先生、気持ちよく送り出して下さった院長先生、師長、病棟主任はじめスタッフの皆さんに感謝致します。本当にありがとうございました。



PCR 唾液採取容器とバーコード



# 水泳競技の救護ボランティアに参加して

看護師 吉村 佳代

東京オリンピックとパラリンピックの水泳競技の救護ボランティアに参加させていただきました。

木島病院を中心としてスポーツナース講習会が立ち上げられ、スポーツの場に看護師として関わりたいと思いつつ、自分にはできないと思って以前は諦めていました。そんな中で、スポーツドクターとの出会いや、オリンピックに関わることを目指して国立スポーツ科学センターに転職した友人がいたり、自分もそうなりたいと憧れるようになり、救護ボランティアに応募させていただきました。

オリンピックでは水球競技の練習会場の救護を担当し、パラリンピックでは競泳のメイン会場での救護をさせていただきました。オリンピックとは違い、パラリンピックでは本当に救護の出番が多かったです。

普段スポーツの大会の救護に派遣される時は、医療従事者は自分一人しかいないことが殆どで、ここでは搬送判断や応急処置と競技復帰のアドバイスをしたりすることが自分の役割かと考えていました。今回はたくさんの医師、PT、看護師が救護スタッフとして参加しており、その中での自分の役割は何だろう、と考えながらの始まりでした。傷病者の対応を経験するたびにこう動いたらいいのかと学び、医師の方々にも『看護師さんには欲しいものを欲しい時に出してもらえる、ドラえもんのポケットでいて欲しい』と言われ、自然とチームワークが出来ていきました。やっと慣れてきた頃に帰る日となり、自分の出番を終えてホッとした気持ちと、うまくやれなかった悔しさと、憧れの場所から離れる寂しさでいっぱいでした。

ベテランの方々ばかりの中で救護も英語も実力不足でしたが、こんな私にチャンスくれた先生、そしてコロナ禍でも快く送り出してくれた職場と家族には感謝しかありません。

看護師という仕事を通してスポーツに関わることができて、そして障がいがあっても輝いているアスリートを目の前で見ることができて、本当に幸せでした。この経験をこれからのスポーツイベントでの救護に生かしていきたいと思えます。この度は本当にありがとうございました。





## オリンピック・パラリンピックを終えて思うこと

看護師 中井 千晶

TOKYO 2020 オリンピック・パラリンピックが開催されることが決まってから、どんな形でもかかわりたいと思い続けてきました。その夢が、オリンピックドクターの北岡先生、パラリンピックドクターの奥田先生の推薦もあり、メディカルスタッフの一員として参加できたこと、そして快く参加させてくださった院長はじめ、病院のスタッフに感謝しています。

コロナの感染拡大により、やはり、家族や友人から本当に参加するのか？という厳しい意見はありました。医療者としての立場と、これまで頑張ってきた選手をサポートしたいという気持ちとの間で悩んだこともありましたが、大会に参加し、実際に選手たちの活躍を目の前で見て、表彰台で涙を流す姿を見たときは、本当に開催できてよかったと感動しました。また、選手をこれまで支えてきた監督やコーチ、水泳連盟の方々からの話を伺うこともでき、パラリンピックにかける皆さんの5年分の思いはとても重く忘れられない言葉でした。

感染予防のため、選手との距離は特別な場合以外は2mの間隔をあける必要があり、話をするなどのコミュニケーションがとれなかったことがとても残念でした。また、アクアティクスセンターは素晴らしい会場でしたが、満員の観客と声援がなかったことも残念でした。

TOKYO 2020 オリンピック・パラリンピックを通し、多くのスポーツ大会や救護活動の経験がある医師、看護師、PT、柔整の方々から、様々な経験を学ばせていただきました。自分が想像していた以上に会場内外を含めた様々なスタッフやボランティアが活動し、「選手が最高のパフォーマンスができるように」というみんなの思いが感じられ、メディカル以外のスタッフからも多くのことを学ぶことのできた大会でした。

会場は、障がい者と健常者が一緒に過ごし、サポートしあう姿が当たり前のようにありました。東京パラリンピックをきっかけに、この当たり前の光景が会場だけでなく、地域や日本社会全体へ広がってほしいと強く思うとともに、自分もかかわっていけたらと思いました。二つの世界大会を通し、これからの自分の課題と新たな目標を見つけることができました。チャレンジしつづけることの大切さを選手の姿から学びました。障がい者スポーツについても、もっと勉強してきたいと思います。一生に一度の夢のような体験ができたことに感謝し、今後もいろんなことに興味を持ち続けていきたいです。



金沢から参加の3人(中央は奥田Dr)

# 3年後のオリンピックに向けて！



木島病院所属ウェイトリフティング選手 中島 一馨

みなさん、こんにちは。リハビリ受付の中島一馨です。

私の目標は3年後のパリで開催されるオリンピックに出場する事です。7月23日から開催された東京オリンピックはたくさんの方々がテレビで観戦された事と思います。私も数多くのメダル獲得の瞬間を観ました。私とあまり変わらない年齢の選手が色々な種目に出場し、表彰台に立つ姿を見てとても刺激を受けました。

選手ではありませんが、聖火ランナーとして今回関わることが出来た事、それが私の東京オリンピックだと思っています。こうして「オリンピック」に関われたことをとても光栄に思い、オリンピックの舞台に少しでも近づけたかなと感じています。生まれ育った珠洲市ではまだオリンピック選手が輩出されていないので、ぜひ第一号になりたいです。

今の私は、地域の方々や患者さんなどから「新聞見たよ」「テレビ見たよ」「これからも頑張るね！」などの声をかけていただく事がとても励みになり、頑張るパワーの源になっています。だからこそオリンピックの舞台に立ち、今まで関わってくださった方々に結果で恩返しができるように日々頑張っています。そして今後いい結果をご報告できるよう努力して参ります。これからも宜しくお願いします。

## 東京オリンピックトーチ



看護師 長村 千香

リハビリ受付をしているウェイトリフティングの中島一馨（もとか）さんが、トーチをディケアに持って来てくれました。

利用者さんからは、歓声が上がリトーチを手に取り実感したり、中をのぞいたり興味津々な様子でとても盛り上がっていました。皆さん間近で見ることの出来ないトーチを見て、オリンピックの開催を楽しみにされていました。

開催期間中には、ディケアでもテレビで観戦しながら選手の方々に応援していました。



### 編集後記

コロナ禍の中に開催されたオリンピック・パラリンピックはどうなるものかと思っていましたが、大変盛り上がり、日本勢の活躍に元気を分けてもらえましたね！季節はもう冬が近づいてきています。季節の変わり目や寒さに備えて健康を保ちましょう。

木島病院新聞委員一同

木島病院

TEL (076) 237-9200

FAX (076) 237-9202

きじま在宅介護センター

TEL (076) 237-7111

FAX (076) 237-1199

健康増進施設

スポーツリハビリ きじま

TEL (076) 237-9200

FAX (076) 237-9202

〒920-0011 金沢市松寺町子41番地1

病院ホームページアドレス <http://www.kijima-hp.or.jp/>